

治癒魔法を使うと発情し理性を飛ばす天才魔法使いの俺様セックスでふわ
とろまんこになるまで深イキ絶頂させられました

朝日 きなこ

「喰わしてくれるんだろ？ お前の全部」

目の前の男は、汗で張り付いた前髪を乱暴にかき上げなら、口元に弧を描いた。翡翠色の瞳の中で、欲情の炎が揺蕩っている。

もう私の全部を曝け出して、ぐちやぐちやにされたのに、男はまだ足りないと言う。なんて傲慢でわがままなのか。

それでも、その手を拒めない。だって、私は知ってしまったから。彼がもたらす激情と快感を…。

第一話

「いいか、王子を治せなければ、お前はクビだ！」

怒り心頭な王の言葉が、真っ白になった脳内で反芻される。

―クビ、クビ、解雇、無職…。

言葉の意味を理解したと同時に、今までの出来事が走馬灯のように流れ始める。

出稼ぎに行くと言って二度と帰ってこなかった両親。

貧しかった幼少期。

いつも優しかった祖父母。

馬鹿にしてきた連中を見返したくて、強くなりたくて、必死で目指した医者という職業。

パンを買うお金を削って、医学書を買ひ漁り、一日中机に向かった日々。三度目の試験でもぎ取った宮廷医師という夢の職。

給料を貯めて、祖父母のために買った王都の家。

クビになれば、今まで手に入れた全てを失う。

それだけは嫌だ。絶対嫌だ。

呆然とする私の前で、王は無慈悲に告げる。

「もし、王子が死ねば、無能な宮廷医師は国外追放させてやる」

残酷な宣言に、心臓が一瞬で凍り付いた。

イーシャン王国の王都ヒンス。

そして、ここは王政の中枢を担う宮廷。王族、貴族、議員が集うこの場所では医師として働いている。

夢だった宮廷医師となり、早三年。色々大変なことはあったが、今回は過去最悪のピンチと言っている。

国王の嫡男であるエリオス王子が、原因不明の病に罹り、意識不明の状態になっているのだ。

幼い頃から大きな病気も怪我も無く、健康そのものだったエリオス王子。しかし、三日前、突然胸の痛みを訴えて苦しみだした。

突発性の心臓疾患を疑ったが、どんな薬も治療も王子には効果がなかった。焦った国王が国中から著名な医者を集めたが、誰も病名すら診断することはできなかった。

当たり前だ。国内最難関の試験を突破した私が治せないものを、他の医者^がが治せるわけがない。

日に日に衰弱していく王子を見て、私は気が付いた。これは、病気ではなく、魔法による呪いだ。

魔法による呪いを見たことは何度もある。種類は様々だが、簡単な呪いなら、薬で治すことも可能だ。しかし、王子の呪いはそんなレベルではない。悔しいが、ただの人間の医者である私に王子を治すことはできなかった。

このままでは、王の命も、私の首も危うい。

どうしたものか。思い悩む私の頭に一人の男の顔が浮かんた。一度は脳内からその顔を追い出すが、あらゆる手を考えても、最後はその顔に辿り着いてしまう。

男の手を借りることは、他の方法より確実性が高く、成功率も高い。だが、出来ることなら使いたくない悪手であることも事実だった。

しばらく逡巡していると、ベッドの上から苦しい王子の呼吸音が聞こえてくる。

「うう…ぐ、ううう……」

額に脂汗を滲ませ、唇を震わすその姿を見て、覚悟を決めた。

「どんな手を使っても絶対に治す。それが私の仕事だから」

自分の胸にそう言い聞かせ、私は一人、宮廷を後にした。

「……ということでした、どうかお力を貸して頂けないでしょうか。リデロ様」

王都の外れにある小高い丘の上に、ポツンと立つ小さな家。赤茶色の三角屋根根に、U字の扉。庭先にはいくつもの花が植えられ、丘陵の風に吹かれ靡いている。

絵本の中の小人が住んでいそうな可愛らしい外観だが、住民は可愛げの欠片もない男である。

「エリオス王子は王位継承権第一位の次期国王です。この国の未来のためにも、彼の呪いを解かなくてははいけません！」

「呪いねえ…」

目の前の男は深紅の革張りソファに深く腰掛け、優雅に紅茶をすすりながら、私の言葉を繰り返す。

綺麗な銀色の長髪を今日は首元で緩く縛っている。切れ長の目に通った鼻筋。端正にできた顔のパーツが寸分の狂い無く配置された、とんでもない美形であるこの男の名はリデロ。

王国一、いや大陸で最も名の知れた大魔法使いである。

二百年ほど前、まだ国境が曖昧で大陸中が戦争に明け暮れていた時代。その強大な力をもって戦争を終結に導き、人間の指導者たちとともに、新しい国境を築いた伝説の魔法使いだ。

大陸にある十三の国全ての建国に携わったと言われている。

「でも、私はもう隠居の身だからね。あまり表の政に関わるのは遠慮したいなあ」

リデロ様は肘について面倒そうに手を払う。

「今回のことは私の独断です。王を含めた、宮廷の誰も知りません。ちょ

つと宮廷まで来て、こつそり呪いを解くだけでいいですから！」

私の必死な懇願に、リデロ様から笑い声が漏れる。

「はは！ 君のそういう図太いところ大好きだなあ。この私に、そこまでズカズカと頼みごとをするのは君くらいさ」

「無礼は承知です」

頭を下げる私とは裏腹に、リデロ様は軽々しい口調で「まあ、いいよ」と答えた。

「私と君の仲だからね。その代わり……」

嫌な予感に顔を上げると、想像通りの笑顔がそこにあった。

「とっても面白い魔法石を見つけたから、その実験に少し付き合ってくれるかい？」

町娘たちが見たら卒倒しそうな微笑みで、あざとく首を傾げるリデロ

様。この笑顔に何度騙されたことか。

美形の笑みの裏に隠れた腹黒さを、私は嫌というほど知っている。

「魔法石……実験……」

「前も付き合ってくれただろう？ 魔法石の利用実験。今度の魔法石はすごいよお。北の大地の永久凍土の下から出てきた千年以上前の上物さ！」

「はあ……」

大陸戦乱時代の英雄と呼ばれ、数多の人間の畏怖と憧憬の象徴である男。それが今や、世界各地の魔法石をいたずらに集め、訳のわからない実験をして遊んでいる変人だ。

リデロ様と出会った日も、彼は森の奥で魔法石を採集に勤しんでいた。

「楽しみなだね。君は妙に魔法石に対する耐性があるから、少々の無理も効く。はあ、ほんとに君は最高のモルモツ……助手だよ！」

今、完全にモルモットって言ったよね、この人。

宮廷医師として働き始める前からの付き合いだが、リデロ様は完全に私のことを丈夫な玩具だと思っている。

絶対、この人のせいで寿命縮んでるわ…。

そう思うが、以前も呪いに罹った患者を助けてもらったことがあるので、持ちつ持たれつの関係だと自分に言い聞かせている。

「え、えつと…じゃあ、王子の呪いを解いてくれるってことでよろしいですか？」

「チャレンジはするよ。ただ、呪いの強さによっては、私では解けないかもね。あ、たとえ解けなかったとしても、ちゃんと報酬は発生するからね」
抜け目ないなと思いつつ、まさかりデロ様に解けない呪いなんてあるわけないと、この時は本気で思っていた。

それが、まさかあんなことになるとは。

翌日、宮廷の医務室にて。

「これは無理だね」

「え、ええ……！」

思いもよらないリデロ様の発言に、大きな声が漏れた。

「じよ、冗談ですよね。リデロ様にも解けない呪いなんて……」

病室のベッドに横たわった王子の胸に、リデロ様が手を当てる。微弱な光とともに、薄い膜が王子の胸を覆いつくす。

「いや、これは私には解けない。これほど高度で、複雑な呪詛魔法は久しぶりに見たよ。ご丁寧に心臓にまで無数の魔方陣を張り巡らせてある。下手に触れば、こちらにも呪いが飛んでくるだろうね」

彼の冷静な声色が、状況の深刻さを物語っていた。

「嘘でしょ…なんとかならないんですか！」

「申し訳ないけど、私には無理だね」

「そんなあ…」

「私とて、この世の全ての魔法を網羅しているわけじゃないんだよ。特に、治癒魔法は専門外と言っている」

「それでも、並みの魔法使いよりは遥かに知識がありますよね？」

「まあ、そうだけど。この呪いに関しては、私の理解を凌駕しているよ」
きつぱりと断れ、肩を落とすしかない。

正直、リデロ様に頼めば丸く収まると思っていただけに、ショックは大きかった。

どうしよう。リデロ様に解けない呪いなら、大陸中、いや世界中探したって治せる人はいない気がする。でも、そんなこと国王に言っても、聞く耳を持つわけではない。

半ばパニック状態のまま、リデロ様に縋りつく。

「リデロ様、お願いします。何か方法はないでしょうか！ このままじゃ、私のくび：じゃなくて、王子の命が！」

「君のそういう素直なところが愛らしくて大好きだよ」

そう言いながら、リデロ様が宥めるように私の頭を優しく撫でた。

「心当たりがないわけじゃない」

「本当ですか！」

「とびつきり優秀な治癒魔法の使い手を知っている。これほど難解な呪いを治せるのはきつと彼だけだろう、っていう人がね……」

なんだ、やつぱりリデロ様ぐらいの方なら、優秀な魔法使いの知り合いはいくらでもいるんだ。あまり、焦らさないでほしい。

「じゃあ、その人に……んう？」

舞い上がった私の口を、リデロ様の人差し指が制する。

「待つて。彼は確かに優秀な魔法使いなんだけど、色々と難がある男でね。門前払いされる可能性が……」

「それでも行きます！」

珍しくリデロ様が心配そうな顔を浮かべる。

しかし、もはや垂らされた糸はその一本だけだ。例えそれが、棘だらけだろうが、毒針だろうが、掴む以外に道はない。

「かなり偏屈で面倒くさい男だよ、ほんとに大丈夫？」

「リデロ様よりもですか？」

「君は時々、本当に失礼だね」

「大丈夫です！ 偏屈で面倒で我儘で、腹黒い大人の男には慣れてます！」
リデロ様の目を見つめて、きっぱりと言いつつ切った。

「…私のことそんな風に思ってたの？」

「リデロ様のことは言ってます」

呆れた顔を見せたが、彼の顔からは心配の色は消えていた。

「まあ、いいや。それだけ図太い神経なら、奴とも案外うまくやれるかもね」

そう言つて笑つたリデロ様の真意を、この時の私は理解できていなかった。

第二話

初夏とは思えない、やけに冷たい風。生い茂った草木の間を流れる、淀んだ空気。時折聞こえる謎の呻き声や動物たちの咆哮。

「ここって…」

「コルセオンの森だよ。知らないのかい？」

「いや、知ってますけど…」

むしろ、この国でその名を知らない者のほうが少ないだろう。

国の北部に位置したコルセオンの森は、一年中深い霧に覆われた魔獣の巣窟だ。

建国より遙か昔から存在すると言われ、誰しもが恐れるこの世の地獄。数多くの絵本で悪者の住処として描かれ、子供たちを怯えさせてきた。

普通の人間なら、まず絶対に近づかない。怖いもの知らずの馬鹿や、魔獣ハンターが時折森に入り、二度と帰って来なかったという話を何度か聞いたことがある。

「初めて来ました」

「私もあんまり好きじゃないなあ。湿っぽくて脳みそにまできのこが生えそうだよ」

「そういう問題じゃ…」

呑気な大魔法使いを横目に私は、震える手を必死に握りしめていた。

「あ、あの、本当にこんな所にいるんですか。その、ヒスイ様というお方は」

リデロ様の話によると、治癒魔法の使い手は、ヒスイという名前の男性でリデロ様より二百歳くらい年下らしい。

数百年という長い時を生きる彼らにとって、二百歳の差が人間に換算するとどれほどなのか、よく分からない。でも、リデロ様からしたら、子どものような感覚らしい。

「なぜ、こんな危険な森にひとりで住まれているのですか？」

「まあ、色々あってね」

含みのある言い方が気になったが、深追いはやめておいた。それに、ヒスイ様の人となりは会えばわかるだろう。

「ちよっと、いやかなり怖いですけど、リデロ様と一緒になら大丈夫ですよ。時間も無いですし、早速行きましょう！」

そういつて、彼の手を取ると、やんわり腕を払われた。

「私は行かないよ」

「はあ？」

信じられない返答に、思わず、がなった声が出た。

「ヒスイにとって、この森の全てが家みたいなものだ。一步でも侵入すれば私の存在気づかれてしまう」

「その何がダメなんですか？」

「私が来たとバレたら、逃げられちゃうねえ」

悪気のない笑顔に、無性に腹が立った。

なぜ、分かった上で私を連れてきたのか。一人でこの危険極まりない森に入れというのか。

色々、疑問はあったが、一番気になったことが口から零れていた。

「：ヒスイ様に何かしたんですか？」

「ひどいなあ。何もしてないよ。ただ昔、私の部下として働いていたことがあっただけさ」

リデロ様の部下として働く自分を想像した瞬間、コルセオンの森の邪気よりも冷たい恐怖が背筋を流れた。

「ああ、そういうこと」

「なんだい、その目」

「いえ、何でもございません」

リデロ様から視線を逸らし、目の前に広がる深い森を眺める。

何者の侵入も拒む門番かのように、大きな木々が真つすぐと伸びていた。

「じゃあ、頑張っておいで。応援してるからね」

「まじかあ…」

「あ、忘れてた。はい、どうぞ」

覚悟を決めた私に向かって、リデロ様が気の抜けた声を掛けてくる。そ

の手には私の背中がすっぽりと収まるほどの大きな籠が握られていた。

「コルセオンだけで取れる花があるんだ。蜜が最高においしいから、ついでに採ってきてくれるかい？ この籠がいっぱいになる程度で大丈夫だから」

「はあ？ え、いや、別に遊びに行くわけじゃ」

「今回の報酬はその花でいいよ」

有無を言わせない瞳に射貫かれて、息が詰まった。

——誰がここまで運んでやったと思っている。この私をタダ働きさせるのか？

言葉にせずとも、リデロ様の恐ろしく綺麗な瞳がそう物語っている。

「でも、魔法石の利用実験に付き合うのが報酬じゃ…」

「それに、今回の移動費は含まれていないよ」

無駄な反抗はあつさり否定され、逃げ場は風塵のごとく消えていく。

「楽しみにしてるね」

「はい、行つてまいります…」

絶望に頭を抱えながら籠を受け取ると、何もない空中に亀裂が走った。一切の躊躇いなく、リデロ様がそこに片手を突っ込む。

空間移動魔法だ。ここへ来るときもこの魔法でやってきた。

「じゃあ、健闘を祈ってるよ」

あつという間に光の中へ消えていったリデロ様を見送り、一人肩を落とす。

「はあ…」

どうやら、頼む人間、いや魔法使いを間違えてしまったようだ。

「ひい…！」

籠を両手で抱え込み、鬱蒼とした森を一人ぼっちで進んで行く。

風に揺られて葉が擦れる音さえ不気味で、恐怖心を煽ってくる。

体感したことのない濃霧が全身を覆い、数歩進むだけで元いた場所を目で捉えられなくなってしまう。

「こんなところじゃ、花どころかヒスイ様を見つけることだってできないよ」

縋るような思いで、手元の方位磁石を見つめる。

リデロ様にもらったそれは、不規則に揺れ、まるで迷子の子どものよう

に回り続けていた。

「ちよつと、これ魔法具じゃないの？ 全ッ然、使えないんですけどー！」
腹黒魔法使いを思い出し、一人怒りに震えていると、背後からガサガサと草木を掻き分ける音が聞こえた。

一瞬の怯えのあとに、やってくる安堵。

「なんだ、リデロ様、やっぱり付いて来てくれたんですね」

あんなことを言いながらも、結局は来てくれたのだと思い、肩の力が抜ける。

「もう、酷いですよ。こんなところに一人で置いてくた、ん……………え」
振り返った先にいたのは、腹黒魔法使いではなく、巨大な熊だった。

「くま…」

私の身長の三倍はあるだろう巨大な体躯に、長い爪、まるで象のような

牙。牙の隙間から涎が垂れて、地面へぽとつと落ちていく。

「熊なの、か……？」

首を傾げた瞬間、巨体の後ろから大きな翼が広がり、突風が吹いた。

「……ッ熊じゃない！！」

叫んだ瞬間、熊のような化物は大木のような前足を振り上げた。咄嗟に避けるが、反対からきた前足の爪が私の背中を切り裂く。

「ああああア……！」

体を引き裂かれたような痛みが、背中に走った。沸騰しそうなほどの熱が背中から全身に伝播していく。

どくどくと血流が乱れ、異常な速さで鼓動が響き、脳内を揺らす。

それでも、医者の端くれだ。この状況では、もう助からないことぐらい分かった。

目を閉じかけた瞬間、謎の音が響いた。

【パルシオ・デルト】

鋭く、けれど温もりを纏った風が一面を吹き抜け、大熊のような化物の腹に袈裟懸けの切り傷が走った。

化物はよろけるが、致命傷ではないようで、再びこちらに向かつてこようと体勢を立て直した。しかし、その威勢を打ち消す声が響く。

「消えろ…、次はその心臓を貫くぞ」

けして大きくはないその声だったが、臨戦態勢の化物を退けるほどの圧があった。

化物は怯み、背を向けて走っていく。

貧血の頭で、その様子をぼんやり眺めていると、声の主がゆつくりと私に近づいてきた。目の前で膝をつくとき、私の背に腕を回して、そつと上体

を起こしてくれる。

「おい、まだ生きてるな。人間」

綺麗な人…。

こんな状況にもかかわらず、その男は見惚れるほどの美貌だった。

冷静に私の怪我の状態を見る表情に見惚れてしまう。

青と緑が入り混じった宝石のような瞳。少し癖のある黒髪で、不健康そうな肌色に真っ白な白衣を纏っている。

その男の姿は、リデロ様に教えてもらった彼の特徴に酷似していた。

「ひ、すいさま…？」

「…なぜ、俺の名前を知っている」

問いに答える余裕はない。歯を食いしばって痛みに耐え、彼の腕を掴んだ。

「王子を、たすけて、くださいッ…」

「…馬鹿か。状況を考えろ。まず治療が必要なのはお前だろう」

呆れた顔でそう言われ、乾いた笑いが漏れた。

「はは…、それで、すね…」

「もう喋るな」

ヒスイは私を抱え直し、前から抱きしめるような体勢になった。背中に回ったヒスイの手が、優しく傷口を撫でる。

ひんやりとした手の感触に浸っていると、ヒスイ様が謎の言葉を唱えた。

【リデルファ】

その瞬間、ちくつとした衝撃が走ったかと思うと、燃えるような痛みがみるみるうちに引いていく。

傷口が塞がっていくのが、見なくても分かる。

すごい…、これがリデロ様の認める魔法使いの力。

脱力したまま、ヒスイ様に凭れかかっていると、痛みと熱がどんどん引いていき、意識も鮮明になっていく。

それに反して、抱き合ったヒスイの体に熱が籠っていくのを感じる。完全に傷が塞がるころには、ヒスイは呼吸を乱していた。

治癒魔法というのは、それほどに体力を使うものなのか。私は動けるようになると、慌てて彼から離れた。

「あ、ありがとうございます。でも、その…大丈夫ですか？」

恐る恐る尋ねると、ヒスイは胸を押さえながら、忌々しげに舌打ちを零した。

「ちっ…クソツ、この程度の治癒魔法で…」

「え、ほんとに大丈夫ですか？」

額に汗を浮かべ、頬は上気して、零れる息は熱い。これでは、どちらが患者か分らない。

脈を測ろうと、彼の腕に手を伸ばすと、反対に手首を掴まれた。その掌はしつとりと汗ばみ、熱を持っている。

異常な発汗に発熱。呼吸の乱れ…。

脳内で症状を整理していると、突然、掴まれた腕をぐっと引かれ、互いの視線が至近距離でぶつかる。

「…ッ、お前、配偶者もしくは恋人はいるか？」

「え、は…？」

あまりに突拍子もない質問に頓狂な声が出る。

ぽかんとしていると、ヒスイ様が苛立った声で詰め寄ってくる。

「いるのか、いないのか！」

焦った様子のヒスイに、慌てて首を横に振る。

「なら面倒なことにはならんな」

勝手に納得すると、後頭部を手で掴まれ、そのまま引き寄せられた。

「な、なに……んう？」

唇に柔らかなものが触れる。

それが、ヒスイ様の唇だと気が付いた時には、彼の舌が口内に入り込んでいた。

「んう、ううう……！」

全く理解できない状況に、脳内がホワイトアウトし、思考が停止する。

は、なんで、キスされてるの？

ついていけない私を置き去りに、口付けはさらに深くなっていく。

「んうう、ううッ…んっ…んんう」

熱い舌が、私の舌に絡みついて、唾液が混ざりあう。

呼吸する間も与えない激しいキスで、脳は酸欠状態だ。

「んんうう…ッ!」

おかしい状況なのに、淫らな舌遣いのせいで考える力がどんどん奪われていく。

流されそうになった時、鬱蒼とした森の景観が目飛び込んできた。

こんなところで何をしているのかと、幾分か冷静になる頭。ヒスイの肩を押し返そうとするが、その腕ごと強く抱きしめられる。なんとか離れようともがくが、力ではまったく敵わない。

「まっ…、なにをして、…ッ」

「説明は後だ……」

熱い舌が首筋を這う。

「ひあっ……！」

「今は、お前が欲しい」

潤んだ翡翠色の瞳が、ぎらぎらと揺れ、赤く染まった私の顔を映していた。

非常事態にも関わらず、あまりに綺麗な顔に見つめられ、反論の言葉が出てこない。呆然としている間に、首筋を舐められ、薄い肌を吸われている。

「ああっ……んう、や、あ、だめ……っ」

「お前、甘いな」

耳元でそんなことを囁かれ、一気に顔が火照りだす。劣情に塗れた声かと息遣いが、じわじわと私の精神を犯していく。

「あまくないっ…」

「甘い、全部喰らいつくしたくなるッ」

耳朶を噛まれ、甲高い嬌声が濃霧の中へ溶けていく。

「ああア…！だ、だめ…いや」

「耳が弱いのか。なら、もっと可愛がってやる…」

舌が耳の中にねじ込まれ、じゅばじゅばと卑猥な水音が鼓膜を揺らす。

「やああッ…！」

「いいな、お前の声。ああ、もっと聞かせろ」

くちゅくちゅとさらに激しく耳を舐められ、腰が震える。

初めての快感は怖くて、いやいやと首を振れば、さらに愛撫が強くなつていく。

「ああっ…あああ、やめ…ッ！」

耳責めに夢中になっていると、ヒスイの片手が私の白衣にかかり、脱がされる。

化物の攻撃でビリビリに破れた白衣は簡単に、腕からすり抜けていく。中のシャツも剥ぎ取られ、下着が露わになった。

「や、まっ……やだあ、だめっ」

下着のフックは壊れ、紐がかろうじて肩に引つかかっているだけの状態だ。ヒスイ様はそれを掴み、剥ぎ取ると、湿った地面に放りなげってしまう。

「邪魔だな」

「うそ、まって…だめ…っ」

濃霧の中とはいえ、外で素肌を晒され、羞恥に言葉を失う。

「安心しろ、俺以外誰もいない」

ヒスイ様が吐き捨てる、ますます羞恥心がこみ上げてくる。

「あなたが見てるから、恥ずかしいのにつ……」

涙目で睨めば、ヒスイ様が意地の悪い笑みを浮かべながら、胸の突起を弾いてくる。

「ほう、恥ずかしいところが勃つのか？」

「ひややあア……！」

尖った乳首がぷるんと震え、もっと強い快感を求めて、硬くなっていく。

「やめ、やだあ……」

「ほんと、美味そうだな……お前」

ヒスイ様の喉仏が上下に動くのが見えた。骨ばった首筋が妙に色つぼくて見惚れているうちに、乳首に生暖かい感触が走る。

「ひぐうう……ッ！」

乳首を咥えられたと気が付いたときには、ヒスイ様の舌先がちらちらと先端を舐め始めていた。

「ああアっ！」

「ここも甘いな、ああ…、頭が沸騰しそうだ」

「ま、だめ…や、乳首、だめえ♡そこ、いやだあ…」

器用な舌先が突起を転がし、弄ぶ。

強烈な快感に、腰が反れて、ヒスイ様の口元に胸を押し付けてしまう。

「あッ、あう、んい！ あああア、いや、だめえ…！」

「ふっ、また大きくなったぞ、そんなに気持ちいいのか？」

「ああア！ や、まって、いや、きもちよくなんか、ない…ッ！」

素直に認められなくて、いやいやと首を振る。そんな僅かに残った理性を嘲笑うかのように、ヒスイ様が耳を舐めた。

「気持ちいいだろ…？」

耳朶を甘く噛みながらそう囁かれ、腰が砕けた。

「ああッ……うあああア~~~~ッ♡♡」

脳天を突き抜ける快感に、視界が眩む。

嘘でしょ…今、いった？

信じられず、目を見開くと、上機嫌な様子でヒスイ様が口元を緩めていた。

「快楽に素直な奴は嫌いじゃない。もっと感じて、乱れて、啼いてみな」
絶頂の衝撃から戻ってこられない私の乳首に、ヒスイ様が歯を立てた。

「ああアッ…！」

甘噛みに驚いた瞬間、尖った乳首をじゅるじゅると吸い上げられる。

「んああ♡ああッ♡んんう~~~~ッ！」

未知の快感に頭も体も追いつかない。本能的に逃げ出そうと腰を引くが、すぐに引き戻される。

「逃げるなよ。乳首を舐られて堪らないんだろ？ ほら、もっと自分で胸を突きだして、強請れ。俺をもっと喜ばせてみる……！」

傲慢不遜な物言いはまるで王様のようなだった。

恥ずかしいのに、悔しいのに、彼の要求を拒めない。彼が与えてくれる快感に、もう心は服従していた。

「もっと……」

はしたなく胸を突き出し、精一杯おねだりをする、彼は満足げに口角を上げた。

「上出来だ」

思いつきり、乳首に吸い付かれ、じゅるじゅると唾液が突起に絡みつく。

甘美なご褒美に、腰をのけ反らせた。

「ああアッ！」

反対の乳首も指先で摘まれ、こねこねと押しつぶされる。容赦のない愛撫の連続で、いとも簡単に絶頂の高みへ上っていく。

「あ、ま、やあ♡ん、いっちゃ、イクう~~~~ツツ♡♡」

「ああ、至福だな。達する瞬間のお前は最高に甘くて、神経が痺れる…もつと、俺を狂わせてくれ」

きつく吸われ、口内で先端をちろちろと舐められる。

絶頂の余韻が抜けない体には、あまりに強すぎる刺激だった。

じゅるじゅる♡じゅぼじゅぼ♡ちゅちゅちゅ♡

「ああッ、うああ♡なあああッ♡や、だめ、やだああ！」

乳首で響く卑猥な水音と叫びのような嬌声がこだまして、脳内で反響

する。

「なにが嫌なんだ？ 好きなだけ、何度でもイけばいい」

そう言いながら、ヒスイ様が赤く腫れた乳首を引っ張りながら、ぐつとつねった。

「ひぐううッ~~~~ッ！♡♡♡」

痛いはずなのに、その痛みさえ甘い痺れをもたらす。

腰をのけ反らせ、快感に耐えていると、乳首をぺろつと舐められた。

「そんなに胸を突き出して、だらしがないな。そんなに俺に虐められたいのか？」

「いや、ちがつ……」

「違うことないだろ。もつと快感に素直になれ……」

艶のある低音が首筋を流れる。脳がどろりと溶ける感覚に、思考が停止

してしまおう。

「あっ…」

その瞬間、乳首に舌が添えられる。

今度は見せつけるように、ゆっくりと突起を舐め上げると、ふっと息を吹きかけられた。

「ああアあ……ッ！」

ダメ押しの一撃で、完全に理性が溶けて、押し込めていた欲望が流れ出す。

「…ッ、ああ♡好き…そこ、いじめられるの、好き…っ♡♡」

「ははっ、いいな、お前。快楽に弱い女は大好きだ」

ヒスイ様が力の限り、乳首を吸い上げる。

「ああア♡ん、ううう♡ああ…つよ、すぎ…だめッ、だめえ…ッ♡♡」

限界まで吸い上げた後に歯を立てられ、脳内がスパークする。

「アああッあああア~~~~ッ！♡♡♡」

あつという間に二度目の絶頂に達してしまう。さっきよりも深い快感が全身を襲い、どろつとした愛液が太股に流れた。

「はあ…ふは、はっはっ…はあ、はあ…！」

びくっびくっとな腰が不規則に跳ねる。

その時、太股に硬いものが当たった。それが、硬く張り詰めた彼のペニスだと気が付くと、反射的に太腿を擦り合わせていた。

ぬちやぬちやと愛液がいやらしい音を立てる。

「誘ってるのか？」

ヒスイ様が布越しに、おまんこを撫でてくる。

「っ…！」

期待感に膾内がきゅつと収縮するが、ヒスイ様が弄ぶように首を横に振った。

「だめだ、まずはこっちで味見させろ」

僅かに口角を上げると、こちらに見せつけながら、唇を舐めるヒスイ様。破壊力満点の色気に、頭がクラクラしてくる。

※こちらはサンプルです。続きは本編にてお楽しみください。